

「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に 充実させることで、「主体的・対話的で深い学び」を実現

2021年1月、中央教育審議会による『令和の日本型学校教育』の構築を目指して（答申）にて、「個別最適な学び」と「協働的な学び」が示された。その2つの学びは、新学習指導要領に明記され、学校現場に浸透してきた「主体的・対話的で深い学び」と、どのような関係にあるのか。そして、どのように実現すればよいのか。中央教育審議会の教育課程部会の委員を務めた上智大学総合人間科学部の奈須正裕教授に聞いた。

「**学びの質を高める学習形態として示された2つの学び**

「**主体的・対話的で深い学び**」は、資質・能力の育成にあたり、目指すべき「**学びの質**」を表現するために示されました。それは、知識を覚えるだけの浅い学びではなく、知識を活用したり、つなげたりする深い学びであり、教科本来の面白さを感じることで学びを自



上智大学 総合人間科学部教育学科 教授
奈須正裕 ます・まさひろ

専門は教育方法学、教育心理学、カリキュラム論。中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会総則・評価特別部会などで、新学習指導要領の策定にかかわる。『個別最適な学びと協働的な学び』（東洋館出版社）など、著書多数。

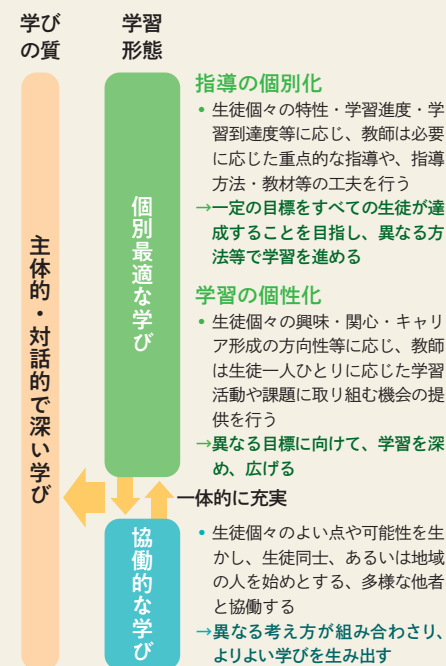
分事化し、仲間や教師、そして教科書等に取り上げられる先哲などと対話をしながら深めていく学びを指します。そうした**学びの質**を実現するための「**学習形態**」として示されたのが、「**個別最適な学び**」と「**協働的な学び**」です（図1）。

その2つの学習形態を行いやすくしようと、児童生徒1人につき1台の端末を配備するGIGAスクール構想が実施されました。自

由に知識にアクセスすることができ、環境の下、児童生徒が自分が必要知識を自ら獲得し、自分で考えを深めていく。それが、今求められている「**個別最適な学び**」です。その

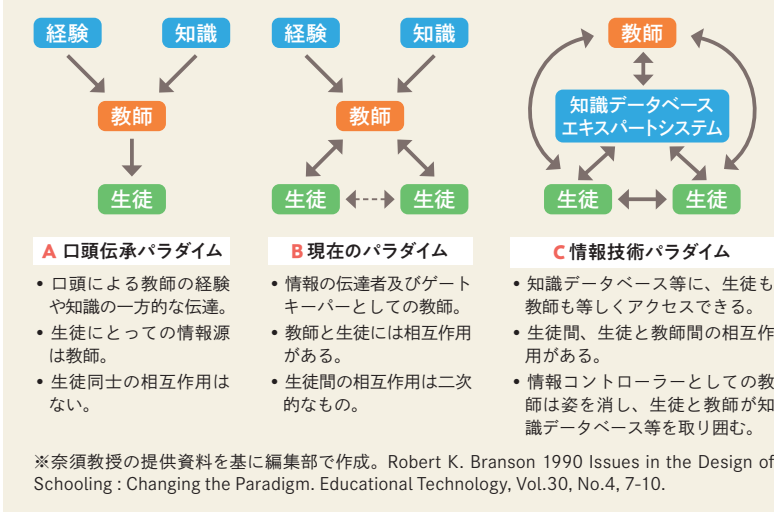
学びは、自立的で個性的な学び手である生徒が相互に問いかけたり、助け合ったりする「**協働的な学び**」によって一層深まります。「**個別最適な学び**」を深めていくとき、自分なりの考えが固まってくる

図1 「主体的・対話的で深い学び」と「個別最適な学び」「協働的な学び」



※中央教育審議会『令和の日本型学校教育』の構築を目指して（答申）と、奈須教授への取材を基に編集部で作成。

図2 過去・現在・未来の学校教育のパラダイム



ると、生徒は、同様に学びを深めている仲間の考えを聞きたくありません。その段階で「協働的な学び」を設定すれば、自身の考えとのすり合わせの中で生じた感想や疑問を率直に伝え合う、極めて互恵性の高い学びが生じるでしょう。

「個別最適な学び」と「協働的な学び」を繰り返し、一体的に充

教師の役割は、学習環境の整備と、思考のサポート

実させることで、生徒は自分の得意な学び方や関心、適性や進路を見だし、「主体的・対話的で深い学び」を実現させていくのです。

「個別最適な学び」「協働的な学び」の実現に際して

参考になるのは、アメリカの学者ロバート・ブランソンが提唱した「過去・現在・未来の学校教育のパラダイム」です。かつては、教師が一方的に知識を教えてきました(図2A)。それが、教師と生徒や生徒同士の対話・協働が行われる現在の姿になりました(図2B)、教師を紹介して知識が生徒に伝達される流れのままです。これからは、生徒が知識に自由に

アクセスすることができると環境をつくり、生徒は自分の意思とペースで学び、他者と対話しながら問いを深められるようなあり方が求められます(図2C)。そのような発想の転換(パラダイムシフト)が重要です。

そうした授業で教師がすべきことは、学習環境の整備や、生徒が持つ知識を概念化したり、構造化したりする思考のサポートです。教師が教えなければ生徒は学ばないという人もいますが、それは違います。人間は、適切な環境があれば、自ら問いを持ち、学びを深めていくことができます。

具体的な授業の方法の1つとして、「単元内自由進度学習」を紹介しましょう。単元の目標と学習内容、授業時数、教材とその使い方を伝えることで、生徒が見通しを持って、自分の好きな方法とペースで学べるようになります。学習が早く終わった生徒は発展問題に取り組み、理解が不十分な生徒は教師が支援する。それは、教育の平等・公正の保証にもつながります。ただ、そうした授業は準備が大

教師が各自の持ち味を發揮し、授業の質を向上させる

変です。まずは年間数回の実施でよいと思います。少ない回数でも継続して実施すれば、生徒の学びの意識は大きく変わるでしょう。

授業づくりでは、教科内で学習目標や育成を目指す資質・能力を共有した上で、「個別最適な学び」と「協働的な学び」をどのように行うのか、実施する単元や授業時数、授業の進め方、教材などについて話し合うことが大切です。

単元ごとに、授業展開や教材、ルーブリックも含めた授業案を作成するのもよいでしょう。同じ教科でも専門領域が異なる教師がいるのが、高校の特徴です。それぞれの持ち味を發揮しながら授業案を作る過程は、互いの指導力を高めることにつながり、ベテラン教師から若手教師に指導ノウハウを伝える機会にもなります。教師による「個別最適で、協働的な学び」が実現すれば、授業の質もおのずと高まるのではないのでしょうか。